

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1989. Vol. 10, 73~80

自閉症を疑われた子の母親への援助過程

酒 木 保 岩 淵 次 郎

家庭の在り方が子供に病理をもたす場合は、子供に限定した治療では限界があり、家族に目を向けた治療が時には必要となる。

ここでは、精神医学的診断で“自閉症”を疑われた男児（3才10ヵ月）の母親を治療援助の対象とし、患児をとりまく家族内人間関係の再構築をはかるなかで、本児の諸症状が改善されていった事例を報告する。

症 例

- (1) 相談者：F（主婦，32才）
- (2) 主訴：次男（3才10ヵ月，以下Tという）の行動異常および言語遅滞
 - ① 3才すぎ頃Tは病気入院したが，退院後まもなく本児が人と視線を合わせなくなったのに気付いた。また数字に固執して絶えず数詞を口ずさむようになった。
 - ② さらに，他家に勝手に上がりこんでテレビをつけたり，雨降りでも平気で跳び出し，濡れながら独り遊びに熱中するなど，突飛でまとまりのない行動が目立ってきた。
 - ③ また以前から気になっていたが，言葉の発達が遅く，現在でもなお一語文程度で殆ど会話にならない。
- (3) Tの生育歴：胎生期・出産時ともに異常なし，初歩1才2ヵ月，初語（マンマ，ブーブーなど）1才2ヵ月。生後8ヵ月乾皮症（軽症），1才2ヵ月時肺炎で入院（約1週間），退院後まもなく本児は，兄の長期入院（リウマチ熱でFの実家近くの病院）と母Fの付添介護に伴い，約2ヵ月間母方祖母宅に預けられた。3才時，陰囊水腫で入院（10日間）手術を受ける。退院後主訴の如き異常行動が目立ちはじめ，3才5ヵ月時公立病院の精神科を受診して“自閉症の疑い”と診断される。幼稚園年少組に入園後間もなく，園長の紹介により筆者の許を訪れた。
- (4) 家族構成：夫婦と男児2人の4人家族。相談者Fは4人姉妹の次女として九州H市

にて出生、年齢の近い同胞たちと自由奔放に育った。地元の私立女子高校を卒業後、近在の商店に勤務するなかで、当時大学生であった現夫と知り合う。5年の恋愛期間を経て地元の出版社に勤務する現夫と結婚(23才時)。その後夫の転勤に伴い東海地方N市に移住、現在に至る。Fの両親はH市にて健在(長女夫婦と同居)であり、Fは長男の夏休みの都度夫を家に残して子供たちと実家の許に長期間(約1ヵ月)寄留する。

夫は、Fとは対照的に男児ばかり4人の末子としてY市にて出生。幼少期父が病死したのちは(夫は父のイメージをはっきり憶えていないという)、和裁の教授ができる母親の腕ひとつで育てられた。母の気丈な頑張りによって同胞は全員大学を卒業するまでにあったが、その間彼らは常に母から威圧され、Fの夫にはこれに兄たちからの圧迫も加わった。

姑は現在Y市にて自活し経済的にも安定している(夫は一年前に家の購入で姑から経済援助を受けている)が、結婚当初から機会あるごとにFの夫婦仲や育児等について干渉し続けてきた。

長男(7才、小学1年)は、行動、性格ともに特に問題はないが、他児に比べて神経質である。またTに対しては兄らしくふるまい他児のいじめから庇う。

(5) 処遇方針：Fには毎週1回宛1時間の面接を、またTにはこれと平行して他の治療者による遊戯療法を継続することとした。

面接の過程

Fとの面接は62セッション(2年6ヵ月)に亘ったが、ここではこれら面接過程の諸相をI期からVI期までに区分して報告する。

I期(1-3セッション)ー育児の反省と家族への不満ー：ここでは主としてFの、症児Tに対する養育方針や姑との関係が話題となった。

Fは長男に対する養育態度の反省(過保護と過干渉で神経質にしてしまったという)から、Tを“解放的”に育てようと努め、なるべく「干渉的にならないようなんでも自分でやらせるようにした」と言う。そして「自分でしなさい」と言う言葉の連呼が結局は「無理に自立を要求しただけで、さっぱりTの気持を汲んでいなかった」のだと反省し、しきりに「もう一度やりなおすことができれば」と悔やむ。治療者(以下Cと略す)は“いままではともかくとして、これからどうしていくのがT君や貴女にとって一番良いかを一緒に考えていきましょう”と応じた。また納得しつつも「Tの言葉がせいぜい伝わるようになればそれでもう十分」だとするFに、“T君が普通の子供と変わらなくなるまで頑張りましょう、大丈夫です”とencourageした。

姑についてFは機会ある度になにかと干渉してくると訴える。特にTを従兄弟達と比べては“この子がこうなったのはFのせい”だとFをなじる。そもそも姑は二人の結婚

に反対であった。いまでも、かねて夫の嫁にしたいと思っていた女性のことを、平気でFと夫の面前で話題にする。夫はそんな姑の話を制止もせずに聞いている。また夫はいつも帰宅時間が遅くかつ不規則で時には朝の4時頃になることもある。Fは姑と自分との関係や、姑の言いなりになる夫への不満等が頭から離れず、いつもイライラした状態でTに接してしまい、それがTの問題行動の原因の一つだと涙で訴える。

この期通所時のFは、Tとにかく口喧しく（靴の履きかえに「自分で早くしなさい、待ってあげるから」等）関わる。Fは、自分のいう“解放的”養育が実は単に自立の過剰な要求に過ぎないことに気付いているものの、日常場面ではつい同じことを繰り返してしまう。

II期（4—8セッション）—情動関係の回復—：「先日Tが市場の店先でパンツを脱いでウンチをしたのです。せめてパンツの中にくれてたら、そのまま連れて帰れたのに」と顔をしかめる。Cは“それでT君をほめてやりましたか、T君にパンツを脱いでウンチをするように教えたのは、お母さんでしょう”とreframingをこころみた。長い沈黙の後Fは照れたような口調で「確かに私、子供の頃親からとやかく言われた記憶がないのです。いつもTと一緒になので何かと欠点が目につき、ついガミガミ言ってしまうのでしょうか」と母親の養育態度を思い起こし、Tに対する接し方を内省する。

Cが町なかで偶然F、Tの母子に出会った際、Fは手をつなぎにくるTに「早く行きなさい」と何度も急立てている。Cには、Fがあたかも邪魔者を追い払っているかの如く見受けられた。

2週後の面接でFは、Tがだしぬけに“こんな難しいこととてもできないよ”と話したといいながら複雑な表情を浮かべる。念願だったはじめての数語文にも拘らず、その時の状況と何ら脈絡のない発言内容だったことに戸惑ったようである。CにとってはTのこの言葉が、ことごとく「自分でしなさい」とTに言い放つF自身の日常的接し方そのものに向けられた抗議に聞こえることをFに伝え、むしろ許客的な雰囲気なかで本児との会話を楽しむよう勧めた。この頃よりTの言葉は急速に増えたが、他方依然続くぐはぐな表現（Fにお父さん、夫にお母さん等）にFは不安を募らせる。Cは、Tの言葉の誤用が、これを契機として賦活されるFとの言語交流を期待し、さらに情動的なかわりを求める意図に基づくものと意味づけた。

Fは、「このごろTは私に両手を広げさせ“お母さん”と叫んで抱きついたり、急に理由もなくしくしく泣いたりするのです」等とTのこれまでなかった情動表出に戸惑う。Cは“大丈夫です。T君はお母さんに受け止めてほしい、労わってほしい等の気持を表現しているのです”と答え、情動的交流を求めているのだと説明した。またFは「近所の子がTのことをバカだけど優しいといったのでつい腹が立ち“バカじゃないわよ”とって叱りつけました」と語気を荒げて訴える等、Tに対する肯定的な感情が表明された。

また「Tがもうすこし良くなれば、みんなでおばあちゃん（姑）の家に行きたいと思います」と、姑との関係の回復を願う動きがみられた。

Ⅲ期（9—26セッション）一家族成員間の情動的交流とTの退行—：例年ならば子供の夏休みに主人を置いて3人で1ヵ月ほど実家に帰ったのが、今年は長男だけが行った。Fは長男の不在でゆとりが持て、以前のようにTに小言をいわずに済む。そのせいかTの甘えが、このところ一段と強くなってきた。

Fは「Tの寝顔がとてもかわいく思えます。見ていると何か悪いことをしてきたような気がして……このごろは家の中の障子は破れ放題です。しかしまあ張れば済むことだからこれでいいと思います」とFは不安なく素直な感情でTを受け入れるようになってきた。

Fが近所から預った乳児の世話をしはじめてから、Tの退行が急に目立ってきた（自分にもおしめをしてくれるようFにせがみ、要求通り取り替える真似をしてやると、あたかも乳児のような仕種をする等）。またほとんど毎日遺糞と夜尿を繰り返えし、しきりにFに抱き付くようにもなる。FはTのこのような激しい退行に強い不安を感じながらも一方では、抱き付かれると「とても可愛い」という。

先日夫は終日Tの御守りをまかされ、流石に音をあげ「女は毎日がこうなんだね」と話していた。以前の夫は毎日帰宅が遅く家ではみんなとあまり話しもせず無愛想であった。その頃の夫はよく「男は常に堂々としているべきだ」というていた。そんな夫が最近では帰宅が早くなり、家庭内のことにも目を向けはじめ、家族との会話も増してきた。そしてFは夫から「以前の君は小言が多かった、それだけでまいってしまうよ」と初めて苦言をいわれたが、Fにはそれがうれしく素直に聞くことができた。夫は子供達にもよく話しかけるようになり、子供達とできるだけ一緒に過ごすように努めているようである。このあいだも新幹線をみんなで見に行こうということになり、見るだけのつもりがTの要求でつい一駅乗車してしまった等、家族ぐるみの行動も増えた。

そしてそんな夫にFは「もう少し（私にも）かまってほしいと思います」と要望する。先日夫から「明日結婚記念日だよ」といわれ、「それを忘れていた自分がとても恥しかったけど、夫が覚えてくれていたのがすごくうれしかった」と喜ぶ。また長男に「お母さんやさしくなったね」とからかわれたり、夫に「以前の君はいつも眉間にしわを寄せていた」といわれても素直な気持ちで聞けるようになった。

やがてTの失禁等は治まるが、反面行動が乱暴になり近所の遊び仲間とよくトラブルを起こす。Fに対しても攻撃的になり、すぐにたたいたり怒鳴りつけたりする。Fが泣き真似をするとTは打って変わってFを労る。

Ⅳ期（27—43セッション）—Tとの絆と夫の役割—：この期に入ってTの会話はますます増し「お空から雨が降ってきた」等的確に表現するようになる。Tの攻撃が幼稚園

の友達に向うようになりしばしば噛みついたり、自分より年長児にも体ごとぶつかっていく。このような園児への攻撃が目立つにつれ、Fへの攻撃は弱まった。

TのFへの甘えは依然続き添い寝を要求して乳房を吸うまでになった。Fが味を聞くと「醬油とソースが出る」と答える。Fは「もっと早くから甘えさせてやればよかった、これまでは一人で寝て全く手のかからない子だと思っていました」と顧みる。

本期後半にはTがFの乳房から“ヨーグルトとミルク”が出て、味も“甘い”と表現した（この頃から以前には嫌っていたチョコレート等の甘い物を求めるようになった）。このような母のオッパイの辛味から甘味への変化は、本児の母に対する image が bad mother から good mother への転換を示唆するものであろう。

最近では家族全員で一緒に朝食をとるのが普通になり「その時の主人のちょっとした言葉かけが、私がいったのとは違って子供にとってもよい影響を与えています」といって、いままで見られなかった夫の頼れる面を確認する。

Tは姑に自分から電話をかけては“おばあちゃん、おばあちゃん”と慕う。以前は“鳥の方が鳴くだけでした”と喋り話の出来ないTを嘆いていた姑も、本児からの電話を喜び、さらにFや夫への干渉も減って、姑と家族の交流が増した。

V期（44—56セッション）—確かな自立—：Tの言葉の発達は理解野、表現野ともに目覚ましい。先日、通園時にTから“お母さん、今日はお家でお洗濯していなさい”といわれた。それでも心配でついていくと、Tはそれを強く嫌って“お母さん、もういいから家にいて、本当に大丈夫だから”と言い張る。Fは「本当にもうついていなくてもよさそう」と思いながらも、友達と登園するTの後を幾度かこっそりつけ無事に登園できる姿を確かめて、ようやく付添いを止める。

Tは幼稚園での集団遊びも上手になったが、遊びに熱中すると早口で発音が不明瞭になり友達から“言ってることがわからない”としばしばいわれる。これについてFは「以前私が早く話さないと言いつつ過ぎたせいかもしれません」と反省し「この頃ではとにかくゆっくりとTの話を聞くようにしています」。この期の後半からTは帰宅後も友達遊びに熱中するようになり相談通所を拒みはじめたため、以後Fの単独通所に切り替えた。

VI期（57—62セッション）—振り返って—：この期よりFだけが来談する。Tの日常行動は改善され、言葉の発音も明瞭となり、会話の内容に多少のちぐはぐな点はあるものの日常生活に支障はない。対人関係も円滑になり集団遊びが他児と変わらないようになる。

幼稚園で初めてFの顔を描き、口を開けて笑っている表情の絵にFは喜ぶ。「以前は大変ないじわる姿さんだったと思います。あの子が何事もなく育っていたら私は育児を感違いしたまま過ごしたと思います。私の感違いにTがストップをかけてくれたみたいで」とこれまでの過程を振り返る。

最終日Fは、Tが一気に描きあげた一冊の画帳を持参した。それにはすべて扉の絵が描かれていたが、最後の1枚だけは開かれた扉だった。Fは「どうやらこれでなんとかやっていけそうです」と育児への自信を表明した。CとFとの相談過程をかえりみて、Fの夫や姑との関係が改善されたことや、母親としての自信を得たことを確認し、2年6ヵ月に及んだ面接を終結した。

ほぼ半年後、Tの反抗やいじけが激しくなり相談を再会、10回に及ぶ遊戯療法(1986, 酒木)により改善され、その後現在(小学校5年生まで)の時点で適応している。

考 察

この症例の病理をTの成育上の問題、家族関係の二点からとらえ、Cとの相談を通して問題解決に至った経過を考察する。

1) Tの成育初期における母との分離体験及び母Fの養育態度：乳幼児期の分離の体験が、その後の発達に様々な影響を及ぼすことは、すでに周知のところである。Tは1才2ヵ月時に、兄の入院による母Fの付添介護に伴い、約2ヵ月にわたって母との分離を体験した。これによりTは、一時的であれ母との交流を遮断された。丁度この時期のTにとって母親Fは、Tの欲求を他の誰よりも上手に受け止め、それを充足してくれる存在であるだけにこの分離によってTは、強いfrustrationをもたられ続けたものと思われる。この状態の持続が、Tの問題行動を誘発した一つの要因になったのであろう。

FがTの異常に気づいたのは、Tが3才の時であり、それがかつての自分との分離による不安からのものとは気付けなかったようである。Tの病理は、初期の分離不安に、家族間の不和によるFの感情のあつれきが加算され、さらに重症化した。Fと家族との感情のあつれきは、Fの不自然な養育態度として現われた。Fは姑との対立、夫への不満から長男との共生関係をいっそう深め、過保護、過干渉に接し神経質にしまった。

Fはこの育児の反省からTを“解放的”に養育したという。Fの解放的養育とは、Tに過度の自立を要求したにすぎなかった。Tは現実の母子関係で、十分な愛情が得られず、常に母から強い命令調の言葉で自立を強要され、冷たくあしらわれると感じるようになる。

自我の形成がいまだ十分ではない乳幼児が、両親との間に基本的信頼関係を築くこの時期に、家族によって痛手をおわされたとしたなら、対人関係を回避して生きようとするのは、当然かも知れない。おそらくこの体験が自閉症と疑われる症状として表出されたのであろう。

2) 家族間に見られる問題：この家族にあってTは姑、夫、Fのもつ不満や憎しみが置きかえられやすい立場に置かれていた。特にFはTに愛情よりもむしろ、姑への怒りや夫への不満をぶつけていたのであろう。FのこのようなTへの対応は、F自身がこの

家庭のなかで孤立し、家族との稀薄な関係のなかで、自らを支えるべき基盤を持ち得なかったという状況を通して、もたらされたものである。

このような状況は、姑と夫ならびにFとの三者関係によって、醸成されたものと考えられる。夫と死別した後4人の子供を育ててきた姑は、子供が一人一人自立していくなかで、取り残されて孤立していく不安が徐々に増していき、末息子との共生関係を強く保つことで、安定を得ようとした。しかし、この息子は大学在学中に、Fと恋愛し母の反対を押し切って結婚した。これは息子が母親にみせた初めての抵抗らしい抵抗であった。Fは姑から息子を奪った存在としてもっぱら嫉妬と敵意の標的とされた。姑は二人の結婚を長年にわたって不当なものを受け取り二人を前にしては秘かに嫁として望んでいた女性のことを話題にしてみせるほどであった。母の支配から離脱を果せずにいる夫は、姑のこのような攻撃、干渉に威圧されるだけでありFを一層孤立無援の立場に押しやる。

3) 改善に至るまでの母親Fの変化過程：まずI期では、夫に対して支配的に、Fに対して干渉的に関与する姑、このような姑に屈伏する夫等が語られるなかで、FはTに対する強い自立の要求が、実はこのように歪んだ家族関係のなかで長男を保護的干渉的に養育せざるを得なかった反動であることに気が始めた。

II期では、Tが店先でウンコをしたことなどを契機として、Tに対するこれまでの養育態度について内省が深まり、より受動的に振舞うように接することができるようになった。このようなFの変化に応じて、両者の言語交流が目立ち始め、これに伴ってTもFとの情動的な交流を求めるようになった。

III期に入ってTは、乳児期までへの退行をみせるが、この一時的な退行を通して、Fとの情動的交流は一層促された。Tとの情動的交流のなかで安定し始めたFは、夫や子供達の言葉を素直に受け止められるようになる。また夫が素直になったFを労ったり、夫と子供達とが、これまでなかった交流を通して家族ぐるみの行動をとるなど、家族全体の絆が確かなものに向う。

IV期、Tのなかで母(のオッパイ)について辛い醤油(bad mother)から甘いミルク(good mother)への認知の転換が起きたのがこの時期である。Tの言葉かけは姑にまで広がり、Tと姑とのあいだに好ましい交流がみられてきた。夫は家族交流を積極的に持とうとするようになり、子供達に対する父親的役割がみられるようになった。Fはこのような夫に新たに依存対象として期待する。

V期、Tに自立的な行動が目立ちはじめ、Fはそれに不安を持ちながらも見守るよう努めた。ときには興奮して言語不明になることがあっても、F自身不安にならずに、干渉を控えるようになる。

VI期、これまでの自分の育児態度の修正や家族間の交流が深まる中で、Fは家族から

期待される母(妻)としての役割に自信を取り戻し、自ら相談の終結を決断するに至った。

山中(1980)は「母親のカウンセリングの目標は“子育ての楽しみ”の回復であり、家族内、ことに“夫婦間での信頼関係の樹立”であり、この目標の達成には、まず“母親自身が自ら尊重されることを体験すること”である」という。ここで我々が扱った症例は、相談過程のなかでこの文脈に添って同じような道程をたどった。

引用文献

酒木 保 誰れに言ってるの? 北海道心理臨床論集1号, 1986, Pp. 24—29.

山中康裕 「村瀬論文へのコメント」自閉症治療に必要なこと, 河合隼雄他(編)臨床心理ケース研究3, 1980, Pp. 82—86.